

「びわ湖体験学習プログラム」による環境マインドの育成

上山 香織 (大学院コース)

1. はじめに

遠藤ゼミでは長年にわたり、学生(小・中・高・大)や教員、一般市民などを対象として、本学調査艇を利用した「びわ湖体験学習」を実施してきた。本研究では、2008年度に実施した体験学習を対象に、これまでの研究やアンケート調査の結果をもとに改善を重ねてきた「びわ湖体験学習プログラム」の評価を行い、この体験学習の意義と今後の展望について考えた。

2. びわ湖体験学習の実践

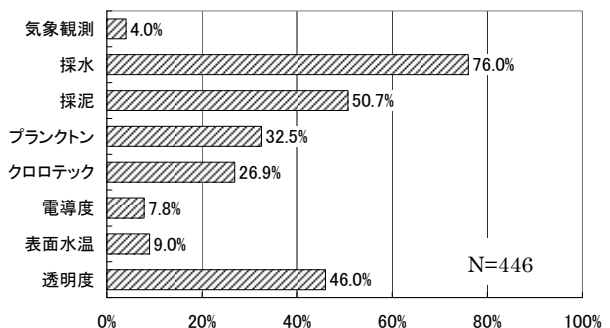
「びわ湖体験学習」は本学の調査艇「清流Ⅲ」(定員 24 名)に乗船して、びわ湖上で行う体験型の環境学習である。この体験学習では、本学がびわ湖調査で実際に使用している観測器具の多くを使用して学習を行っている。現在体験学習で実施する主な観測項目は、透明度の測定、表面水温、電気伝導度の測定、多項目水質計(クロロテックなど)による水質調査、プランクトン採集と顕微鏡観察、採泥、採水、気象、船位などの観測である。

2008年度に実施した体験学習はのべ 37 回に上り、参加人数は合計 532 名となった。

3. アンケート調査の実施・分析

本研究では、学習者の一部(のべ 482 名)を対象にアンケート調査を行った。調査の結果、大部分の参加者から「学習を楽しめた」「他の参加者と協力して取り組めた」という回答が得られた。学習全体では、深層水や透明度など、水質についての観測が参加者の興味をひいた。(右表)学習後には、「びわ湖にもっと興味を持とう」「びわ湖をきれいに守っていかなければ」という意識が芽生えた様子が伺えた。学校での学習やメディアからの情報ではなく、観測を通して自分自身でびわ湖の現状を確かめたことで、以前よりもびわ湖を身近な存在として認識できるようになったからではないだろうか。

Q.調査の中で特に興味を持てたものは?



4. 体験学習プログラム充実のための改善策

これまでの体験学習を通じて得たことや、アンケート調査、学生レポートの分析などから活動を見直し、プログラムをより充実したものにいくつもの改善を行った。

- ◎ハンドブックの改訂
- ◎南湖と北湖の比較ができる観測態勢
- ◎「びわ湖・瀬田川ワザベトリ」(研究施設)の活用
- ◎プランクトン図鑑の活用と顕微鏡の増設
- ◎ビデオ教材作成など事前学習の充実
- ◎観測データ、記念写真の持ち帰り